



第43回NM-GCOEセミナー

佐々木 康綱 先生

(埼玉医科大学国際医療センター・教授)

2010.11.9

薬学研究科
第1小講義室

～がん分子標的治療薬の最新の動向とバイオマーカー～



講師:佐々木康綱先生

分子標的薬は細胞の増殖や血管新生など、腫瘍に特異的なメカニズムに関する分子をターゲットとするため、従来用いられてきた化学療法剤と比較して有効性や副作用の軽減に期待の寄せられている分野です。本日の講演では、佐々木先生が取り組んでいる分子標的治療に関する最新の知見や、臨床効果の評価方法について講演して頂きました。

分子標的治療では、あらかじめバイオマーカーの発現を解析することで有効性が期待できる症例を絞り込めるといった利点があります。HER2 陽性乳がんの治療において用いられている Trastuzumab を、同様に HER2 陽性胃がんの治療に用いた所、高い治療効果を得られたというお話を伺い、基礎研究におけるバイオマーカーの探索やバリデーションが今後益々重要になると感じました。

一方で、現在承認されている分子標的薬の中には、真のエンドポイントである全生存期間を延長するというエビデンスが得られていないものもあるそうです。分子標的薬の使用によってもたらされる効果がどの程度患者さんのベネフィットに繋がるのか、正確に判断し治療薬を選択する必要があると感じました。

小板橋 佑介 (薬物送達学分野・大学院生)



参加学生の感想

分子標的薬は、従来の抗がん剤と異なり、腫瘍の縮小 surrogate endpoint と延命効果 true endpoint が必ずしも一致しないため、新薬の承認の基準として、患者の生存期間や QOL、がんが憎悪までの期間が重要となるのが理解できた。分子標的薬は、バイオマーカーによって投与前に薬の効果や副作用の有無を予測でき、患者に無駄な薬を投与することを回避することで、副作用や薬の費用などの患者の負担を軽減できるため、今後のがん治療の中心となることが期待できると考えられる。

がん治療薬およびバイオマーカーの最前線の研究に関して貴重なお話を拝聴することができました。内容も丁寧なご説明で分かりやすく、分子標的治療薬の臨床に関して知識を深める事ができ、非常に有意義な御講演でした。

現在のバイオマーカーに関する情報を、実際のがん治療薬の例を中心に知ることができました。質疑応答ではバイオマーカー探索に関する臨床上で問題を聞くことができ、大変有意義な機会となりました。

寿命を少しでも延ばせば治療薬として承認されるのか。患者さんの QAL から見て意義あることなのか。新薬承認の課題について深く考えさせられました。(支援室)

